

令和8年度 卒後アンケート（2024年度卒業生）結果報告

卒後1年を経過した卒業生に対して、本学部のディプロマ・ポリシーの活用度や本学教育に対する意見、職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を実施した。

1. 対象および方法

対象者：2024年度卒業生 99名

対象者は、COVID-19感染拡大の影響により、1～2学年次において遠隔授業および臨地実習の日数・内容の制限があった学年である。

調査期間：令和8年7月1日(水)～8月7日(金)正午（再通知：7月21日(火)）

方法：無記名 web 調査

卒業生の自宅へQRコード付きの依頼文を郵送し、Google フォームへの入力を依頼した。返礼として500円のAmazonギフト券の送付を行った。回収数が少なかった（27件）ため、愛知医科大学病院及びメディカルセンターへ就職した卒業生（57名）に対し、院内のメールボックスへ依頼文を配布した。また、同窓会から2024年度卒業生へメールによる依頼を行った。

2. KEY POINTS

- **ディプロマ・ポリシー達成度はおおむね良好だが、一部に課題：** 全体的なディプロマ・ポリシー（DP）の達成度は80%を超え高い水準を維持している。ただし、例年同様に「科学的・批判的思考」や「看護学への貢献意欲」の項目は他と比べてやや低い傾向がみられた。
- **実習環境への高い評価と、より実践的な教育への要望：** 大学病院等における充実した臨地実習やサポート体制は極めて高く評価された。一方で、臨床で直面する「多重課題への対応」「急変時の判断」「実践的看護技術」のさらなる教育強化が求められている。
- **良好な初期適応と、卒業後の継続的なキャリア支援へのニーズ：** 満足度は高く「即時の離職予定者」は0%と初期適応は極めて良好である。しかし、将来的な離職を見据える者は半数を超えており、本学への「転職情報提供（57.9%）」や「卒後教育プログラム（26.3%）」の期待がある。

3. 結果

回収数は57名（昨年度31名）、回収率57.6%であった。

1) 対象者の基本属性

対象57名のうち、女性は56名（98%）であった。看護職種として正規雇用で就業している者は55名（97%）であり、看護師として就業しているものは51名（89%）であった。

2) ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の活用状況（項目1～9）（表1）

ディプロマ・ポリシー9項目の活用状況を「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で調査した。多くの項目で、「そう思う/少しそう思う」と回答した卒業生が80%を超えており、ディプロマ・ポリシーの達成度は高いと考えられた。一方で「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」に関しては、20～30%の卒業生が「あまりそう思わない」と回答しており、他の項目と比較して達成度がやや低い結果であった。この結果は例年と大きな変化はなかった。

表1 ディプロマポリシー活用状況

	N=57			
	そう思う 名 (%)	少しそう思う 名 (%)	あまりそう思わない 名 (%)	思わない 名 (%)
1 看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる	22 (38.6)	29 (50.9)	5 (8.8)	1 (1.8)
2 看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている	19 (33.3)	32 (56.1)	5 (8.8)	1 (1.8)
3 看護専門職者として科学的、明瞭かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる	12 (21.1)	31 (54.4)	12 (21.1)	2 (3.5)
4 看護専門職者として倫理的に思考することができる	17 (29.8)	34 (59.6)	5 (8.8)	1 (1.8)
5 看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している	13 (22.8)	36 (63.2)	8 (14.0)	0 (0.0)
6 看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている	23 (40.4)	28 (49.1)	5 (8.8)	1 (1.8)
7 あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる	25 (43.9)	28 (49.1)	2 (3.5)	2 (3.5)
8 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている	12 (21.1)	31 (54.4)	11 (19.3)	3 (5.3)
9 看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる	21 (36.8)	30 (52.6)	5 (8.8)	1 (1.8)

3) 現在看護職として働く中で、本学の教育で満足・評価している点、不足している点について。また、本学での学びが、現在の自身の看護に取り組む姿勢・態度や現在自身に必要な能力・技術にどのような影響を及ぼしているか。(自由記載)

はじめに、満足している点では、「大学病院との連携・環境・入職への繋がり」「実習のカリキュラムと経験・学び」「技術演習・試験・看護技術」「思考力・人間的成長・講義」「教員・アドバイザー・サポート制度」等が挙げられた。次に、不足している点では、「臨床実践・演習・技術への要望」「アセスメント・記録能力」「多重課題・現場での状況」「社会人マナー・人間関係・教育体制」等が挙げられた。さらに、本学での学びがどのような影響を及ぼしているかについては、「学習姿勢・継続的な学習・基礎知識」「アセスメント・論理的思考・倫理観」「患者理解・看護観・実習経験」が示された。これらの結果から、本学での学びは臨床現場における看護観や継続的な学習態度の土台として確実に活かされており、今後はより実践に即した技術・判断力の教育体制を強化していくことが求められている。

4) 職業経験の質について (表2)

卒業生の職業経験の質に関する得点は、 115.9 ± 18.0 点 (平均 $\pm$ SD) であった。なお、昨年度の 119.0 ± 16.7 点と比べて大きな変化はなかった。

卒業生の職業経験の質に関する得点が高かった項目は、下位尺度Ⅰ「仕事を続ける中で、自分にあった日常生活を築く経験」、下位尺度Ⅱ「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」、下位尺度Ⅲ「他の職員と関係を維持する経験」であった。一方で、下位尺度Ⅴ「発達課題の達成と職業の継続を両立する経験」の質得点が低かった。この結果も例年と大きな変化はなかった。

表2 職業経験評価尺度-臨床看護師用-の結果

	N=57			
	平均	標準偏差	最大	最小
Ⅰ 仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を築く経験	20.5	4.1	25	11
Ⅱ 看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験	20.2	3.8	25	5
Ⅲ 他の職員と関係性を維持する経験	20.4	3.5	25	5
Ⅳ 看護職としての価値基準を確立する経験	18.2	3.9	25	5
Ⅴ 発達課題の達成と職業の継続を両立する経験	17.7	3.8	25	10
Ⅵ 迷いながらも職業を継続する経験	18.9	3.4	25	11
合計	115.9	18.0	150	70

5) 現在の職場で必要とされている能力とそのために大学で学んでおくよかったこと（自由記載）。

必要とされる能力としては、「優先順位・多重課題・効率」「判断力・迅速な行動」「状態変化の観察・予測」「急変対応・臨機応変な看護」「専門知識」「患者・家族支援」「コミュニケーション・協調性」等といった多重課題・急変下における臨床判断および看護実践能力や患者・家族支援およびチーム医療を支えるコミュニケーションが挙げられた。また、そのためには「優先順位・多重課題・タイムマネジメント」「急変・緊急時・臨床での対応」「専門基礎知識（解剖・病態・疾患）」「アセスメント・思考力・看護実践知識」「コミュニケーション・言語化・説明力」「学習姿勢・メンタルヘルス」の能力を高めておくこと等を大学で学んでおきたかったということが挙げられた。

6) 大学生活を振り返ったときに、社会人として役立っていること（表3）

大学生活を振り返ったときに社会人として役立っていることを、14項目について「役に立っている」から「役に立っていない」までの5段階で調査した。14項目中最も「役に立っている」と回答した卒業生の割合が多かった項目は「11. 大学での同級生との交流」32名（56.1%）であり、次いで「3. 大学での演習における学修内容」、「12. 大学での先輩との交流」26名（45.6%）、「1. 大学生活全般」「4. 大学の実習で修得した看護実践能力」23名（40.4%）であった。大学生活の中で得た人間関係や社会経験が、卒業後に役立っていること。加えて、演習や実習での学びも良い影響を与えていることが伺えた。結果の傾向は、昨年度と比較して大きな変化はなかった。

表3 大学生活のうち社会人として役立っていること

	N=57				
	役立っている	少し役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
	名 (%)	名 (%)	名 (%)	名 (%)	名 (%)
1 大学生活全般	23 (40.4)	26 (45.6)	6 (10.5)	2 (3.5)	0 (0.0)
2 大学での講義における学修内容	18 (31.6)	33 (57.9)	5 (8.8)	1 (1.8)	0 (0.0)
3 大学での演習における学修内容	26 (45.6)	23 (40.4)	5 (8.8)	2 (3.5)	1 (1.8)
4 大学の实習で修得した看護実践能力	23 (40.4)	28 (49.1)	4 (7.0)	1 (1.8)	1 (1.8)
5 大学での研究的思考の学び（教養ゼミ・卒業研究Ⅰ、Ⅱなど）	11 (19.3)	20 (35.1)	16 (28.1)	9 (15.8)	1 (1.8)
6 大学での看護実践能力修得のためのプログラム（看護総合・卒業前研修など）	19 (33.3)	29 (50.9)	7 (12.3)	1 (1.8)	1 (1.8)
7 大学でのボランティア活動	5 (8.8)	21 (36.8)	23 (40.4)	4 (7.0)	4 (7.0)
8 大学からの短期留学	4 (7.0)	6 (10.5)	37 (64.9)	1 (1.8)	9 (15.8)
9 教員との交流	15 (26.3)	25 (43.9)	14 (24.6)	2 (3.5)	1 (1.8)
10 事務職員との交流	7 (12.3)	19 (33.3)	19 (33.3)	6 (10.5)	6 (10.5)
11 大学での同級生との交流	32 (56.1)	21 (36.8)	3 (5.3)	1 (1.8)	0 (0.0)
12 大学での先輩との交流	18 (31.6)	17 (29.8)	14 (24.6)	1 (1.8)	7 (12.3)
13 大学の部活動やサークルでの交流	20 (35.1)	18 (31.6)	9 (15.8)	2 (3.5)	8 (14.0)
14 他大学の学生との交流	10 (17.5)	11 (19.3)	23 (40.4)	2 (3.5)	11 (19.3)

7) 現在の仕事のやりがいと満足度、離職、進学希望の有無

卒業生に対して、現在の仕事のやりがいを「大変感じている」から「全く感じていない」、仕事の満足度について「大変満足」から「全く満足していない」の各々4段階で調査した。約80%の卒業生が仕事のやりがいについて、「大変感じている/感じている」と回答した。仕事の満足度については、「大変満足/満足」と回答した卒業生は75%（昨年度74%）であった。

一方で、「仕事をやめようと考えていますか」という問いに対して、離職する予定と回答した卒業生はいなかった（昨年度6.5%）。また、56.1%（昨年度64.5%）の卒業生が、離職を考えているが、今すぐは辞めないと回答した。卒業生らは仕事のやりがいを感じていながらも、将来的には現在の職場の離職を検討していた。また、大学院の進学に興味があると回答した卒業生は17.5%（昨年度16.1%）であった。

卒後本学に希望することについて複数回答で調査した結果、最も多かった回答は、「転職に関する情報提供」33名（57.9%）、であり、次いで「卒後教育プログラム」15名（26.3%）であった。

8) 愛知医科大学の卒業生で良かったこと・愛知医科大学の「伝統」を感じるもの(こと)(自由記載)

良かったことは、「職場における先輩・同期とのつながり」「大学時代の同期・部活・サークル」「先生との出会い・手厚い指導」「付属病院・大学病院での実習環境・施設」等であった。「伝統」を感じるものとしては、「職場に先輩が働いていること」等があった。

4. まとめ

今年度は、従来の自宅郵送調査、愛知医科大学病院に就職した卒業生への院内配布に加え、メディカルセンターに就職した卒業生への院内配布と同窓会のメール案内を併用することで、回答数 57 名（前年比 26 名増）、回収率 57.6%と大幅な向上を達成し、より信頼性の高い結果が得られた。

全体の傾向として、卒業生の DP 達成度はおおむね高く、大学生活で得た「同級生や先輩との交流」が卒業後の重要なサポート資源として機能していることが再確認された。対象となった卒業生は、1～2 学年次に COVID-19 感染拡大に伴う遠隔授業や臨地実習の制限を一部で受けた世代であるが、高学年時における実習・演習の質的担保により、仕事への満足度（75%）は高く維持され、「今すぐ離職する予定の者」が 0 名になるなど、初期の適応はスムーズに進んでいると考えられる。

しかし、多くの卒業生が仕事へのやりがいを感じる一方で、半数以上（56.1%）が「将来的な離職」を視野に入れている。これは職業経験の質評価において「発達課題の達成と職業の継続を両立する経験（下位尺度 V）」の得点が依然として低いことと整合しており、ライフワークバランスや心身の健康維持に対する課題を示している。こうした背景から、卒後本学に期待する支援として「転職に関する情報提供（57.9%）」や「卒後教育プログラム（26.3%）」が上位を占めており、個々の多様なキャリア形成に合わせた柔軟な支援体制の構築が求められている。また、臨床現場のニーズとして挙げられた「多重課題・急変下における判断力」や「実践的なアセスメント力」を育む教育を、卒前・卒後にわたってシームレスに提供していくことが、今後の重要な課題である。

5. 見出された課題と今後の対応策

本調査結果から抽出された、今後の看護学部教育および卒後支援における課題と対応策は、以下の 4 点に整理される。

1) 実践的看護技術と臨床応用能力（多重課題・優先順位）の強化

卒業生が臨床において「優先順位を立てて多重課題をこなす能力」や「タイムマネジメント」に直面し、不足を感じていることが明確になった。学部教育において、単発の技術修得に留まらず、複数患者への援助を想定した多重課題演習等を組み込む等、臨床応用力を段階的に育成し強化する。

2) 臨床判断アセスメント能力（変化の予測と根拠に基づく行動）の育成

疾患や解剖生理の知識を患者の状態変化（急変含む）に結びつけるといった臨床推論への苦手意識が示された。基礎知識の習得だけでなく、バイタルサインや検査データなどからリスクを予測した臨床推論・臨床判断を行い、根拠を持った看護介入を導き出す演習を推進する。

3) ワークライフバランスとキャリア継続のためのメンタルヘルス支援の充実

「発達課題の達成と職業継続の両立」の得点が例年低く、将来的な離職を検討する層が過半数に達している。卒後も健康を保持し、仕事と日常生活を両立しながら主体的にキャリアをデザインする力を育成できるよう学生委員会と情報を共有し、学部教育の充実につなげる。

4) 卒後継続教育プログラムの充実とキャリア支援の推進

「卒後教育プログラム」への明確なニーズがある。キャリアアップとして大学院進学に興味を持つ卒業生もみられ、卒後の多様なキャリア構築や生涯学習の支援体制が求められている。卒後の生涯学習への接続を見すえ、学部教育における臨床推論・臨床判断能力を段階的・体系的な学びとして学習環境の整備を充実させるとともに、キャリアチェンジ、大学院入試等に関する情報提供のニーズを、同窓会やヘルスケア共創センター等と共有する。

2026 年度 愛知医科大学卒業生の就職先に対する調査 集計結果報告

卒業生の就職先から本学卒業生のディプロマポリシーの到達度について第三者評価を得ることを目的に、令和 7 年度に本学看護学部卒業生が入職した愛知医科大学病院の病棟管理者(師長)および、外部施設の教育担当者に対し、本学卒業生(臨床 2 年目)の状況等について調査を実施した。

1. 対象および方法

1) 対象者

平成 29 年度カリキュラムを履修した卒後 2 年目の卒業生(令和 7 年度入職者)を受け入れている愛知医科大学病院の病棟師長および、外部施設の教育担当者であった。なお今年度の調査依頼は、本学卒業生が令和 7 年度に看護師・保健師として就職した施設とした(助産師課程の学校は除く)。

2) 調査期間

2026 年 7 月 1 日(水)～8 月 7 日(金)

3) 方法

Web アンケート

2. 調査内容

卒業生のディプロマポリシー(以下、DP)の到達度について、社会人基礎力の項目を用いて到達度およびさらなる修得が望まれる能力、および、卒業生の動向について退職者の退職理由について調査した。なお、今回活用する社会人基礎力の項目は、本学の DP の内容が網羅されており、かつ臨床でも活用されている指標であることから理解が得られやすいと考え用いた。また、退職理由については、厚生労働省、日本看護協会の看護師の離職に関する調査結果から上位のものを抽出した。

3. 結果

愛知医科大学病院 23 部署(外来含む)、メディカルセンター 3 部署、ならびに外部施設 20 か所(内、保健センター等 1 か所含む)計 46 か所に配布し、回答のあった 31 件を有効回答とした(有効回答率 67. 4%)。

1) 本学の卒業生(臨床 2 年目)の社会人基礎力の到達度の評価について

本学卒業生の社会人基礎力の到達度について、“そう思う”“少しそう思う”を合わせた割合で示す。最も到達度が高い項目は「【物事に進んで取り組む力】与えられた役割や業務について疑問があるときは質問し理解しようとしている」「【ストレスの発生源に対応する力】自分の長所、短所を理解し調和を保つよう努力している」の 80. 6%であった。その他、到達度の高い項目は「【他人に働きかけ巻き込む力】業務遂行上困難なときその他のメンバーに協力を依頼している」の 77. 4%、「【相手の意見を丁寧に聴く力】患者・家族(対象者)の苦情や不平に対してその真意を理解しようとしている」「【自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力】所属施設・部署の目標、割り当てられた業務を理解し、仕事の優先度をつけている」の 77. 4%であった。

一方、到達度の低い項目は、「【現状を分析し目的や課題を明らかにする力】チームの目標にむけて自分のできることは何か考え発言している」「【新しい価値を生み出す力】日常業務のひとつひとつにもっと良いやり方や効率的な方法はないかといった視点で取り組んでいる」の 41. 9%であった。

Q1 貴部署に在籍する令和7(2025)年度入職の本学卒業生(卒後2年目)のおおまかな傾向として最も近いと思われる番号を選択してください。

選択肢	n=31			
	そう思う/ 少しそう思う		どちらともいえない/ あまりそう思わない/ そう思わない	
	n	%	n	%
【物事に進んで取り組む力】 与えられた役割や業務について疑問があるときは質問し理解しようとしている(DP:1,2,7,8,9)	25	80.6	6	19.4
【他人に働きかけ巻き込む力】 業務遂行上困難なときその他のメンバーに協力を依頼している(DP:1,3,4,7,9)	24	77.4	7	22.6
【目的を設定し確実に実行する力】 上手くいかないことはその原因や方法について調べている(DP:1,2,3,4,7,10)	19	61.3	12	38.7
【現状を分析し目的や課題を明らかにする力】 チームの目標にむけて自分のできることは何か考え発言している(DP:1,2,3,4,5,6,7,8,9)	13	41.9	18	58.1
【課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力】 与えられた課題について計画を立てている。進捗に影響を及ぼさないようにしている(DP:1,2,3,4,5,6,7,8,9)	20	64.5	11	35.5
【新しい価値を生み出す力】 日常業務のひとつひとつにもっと良いやり方や効率的な方法はないかといった視点で取り組んでいる(DP:1,2,3,4,5,6,7,8,9)	13	41.9	18	58.1
【自分の意思をわかりやすく相手に伝える力】 結論と経過、自分の意見を区別して説明している(DP:2,3,4,5,6,7,9)	15	48.4	16	51.6
【相手の意見を丁寧に聴く力】 患者・家族(対象者)の苦情や不平に対してその真意を理解しようとしている(DP:2,4,5,6,7,9)	23	74.2	8	25.8
【意見の違いや立場の違いを理解する力】 相手のペースに違いを理解しそれに合わせた方法を選択している(DP:2,3,4,5,6,7,8,11)	22	71.0	9	29.0
【自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力】 所属施設・部署の目標、割り当てられた業務を理解し、仕事の優先度をつけている(DP:2,3,6,7,9)	23	74.2	8	25.8
【社会のルールや人との約束を守る力】 所属施設・部署のルールを率先して守っている(DP:1,4,5,6,7)	22	71.0	9	29.0
【ストレスの発生源に対応する力】 自分の長所、短所を理解し調和を保つよう努力している(DP:1,3,7)	25	80.6	6	19.4

図1 本学の卒業生(臨床2年目)の社会人基礎力の到達度の評価

2. 令和7(2025)年度入職の本学卒業生(卒後2年目)の傾向として、さらに向上が望まれる能力についてチェックを入れてください(複数回答可)。選択肢の他にがある場合は、その他を選択し自由記載欄にご記入ください。

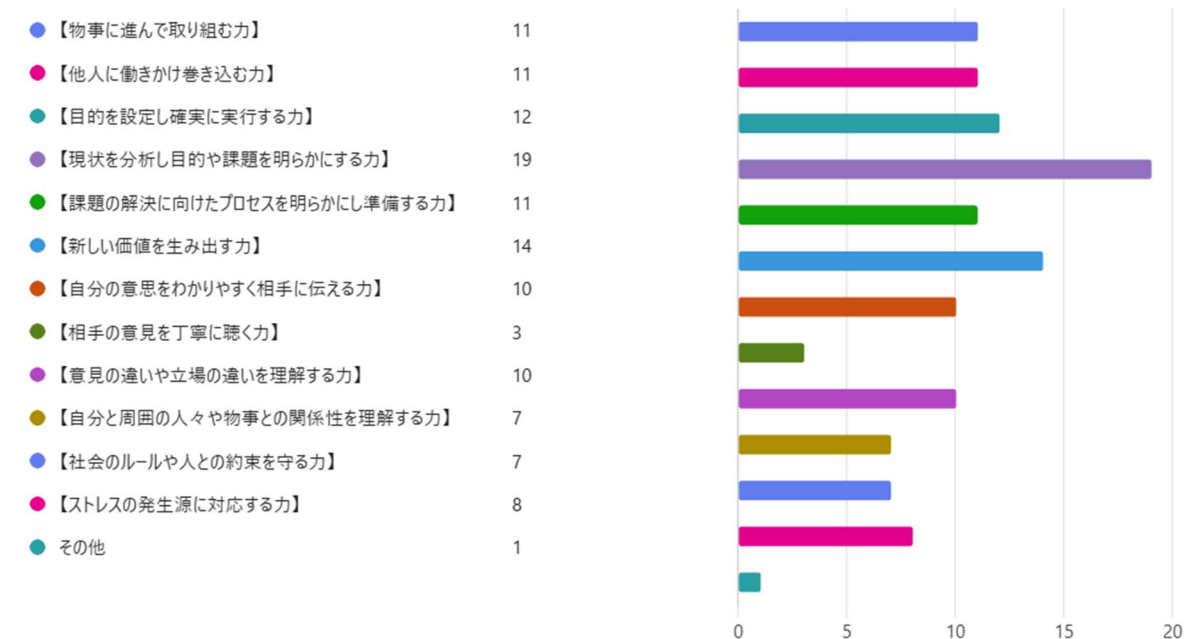


図2 本学卒業生のさらに向上が望まれる能力

2) 本学の卒業生（臨床2年目）において、さらに向上が望まれる能力について

さらに向上が望まれる能力について、最も回答の多かった能力は【現状を分析し目的や課題を明らかにする力】であり、次いで【新しい価値を生み出す力】、【目的を設定し確実に実行する力】、【物事に進んで取り組む力】、【他人に働きかけ巻き込む力】であった。

3) すでに退職した本学の卒業生（臨床2年目）がいる場合の退職に至った理由について

31 件中 29 件は“退職者はいない”と回答した。退職者のいた部署/施設において退職に至った理由は、【身体的/精神的な健康問題】2 件であった。

4) 本学の卒業生（臨床2年目）に対して気づいた点について（自由記載）

- 仕事や自身の役割に対し、責任感と完遂能力があり、高く評価します。
- 常に前向きで積極的に責任感強く業務が実施できている。課の使命を常に意識し、とても協力的に業務を果たすことができる。挑戦意識が旺盛で、学びながら、常にチャレンジしている。
- できているのに不安が強く、何度も先輩に確認する。 他

5) 本学に期待することや要望事項について（自由記載）

- 社会に適応する能力、多重課題に対応する能力、自発的に学ぶ姿勢が養われることを期待します。
- 大学のゼミナール等を通して、自治体や企業と連携して、保健活動の実践ができる経験が持てたらよいと思います。 他

4. まとめ

1) 本学卒業生（卒後2年目）のディプロマポリシーの到達度について

今回の調査結果から、本学の令和7年度卒業生（卒後2年目）は、昨年度の結果と比較して全体的に到達度が低い傾向にあった。物事に進んで取り組むこと、ストレスの発生源に対応すること、他人に働きかけ巻き込むこと、相手の意見を丁寧に聴くことができること、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力は高いと評価された。一方で、現状を分析し目的や課題を明らかにすることは十分ではないという特徴は昨年度と同様であり、新しい価値を生み出すことが十分でないという点は昨年度とは異なっていた。また、社会のルールや人との約束を守ることについては昨年度より低い傾向が見られた。

積極性やコミュニケーション能力の高さは例年通りの傾向であり、本学学生の強みである。患者と関わる丁寧な姿勢を評価したり、仕事や自身の役割に対して責任感と完遂能力があるというコメントもあった。講義や演習、実習に真摯に取り組む本学学生の姿勢、それを達成できる環境を作る本学教職員の取り組みは今後も継続していく必要がある。一方で、対象となった卒業生は、高校生の時期に COVID-19 感染予防のために活動自粛や遠隔授業を経験した学年である。大学入学時には感染者数が少なくなり制限が緩やかとなって日常の生活を取り戻したが、学習を積み重ね大学での高度な学びに対応するための基礎力を養う高校生という時期を感染拡大防止のための自粛生活の中で過ごしてきた学生は、様々な人々との関わりの中で培われる現状分析や課題の検討の能力が低い傾向にあったのではないかと推測される。今回の結果で到達度の低かったこれらは、本学 DP の「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」と大いに関連する。学修成果把握のためのアンケートにおいても本 DP の到達度は低い傾向にあり、本 DP の到達度を向上させることはこれまで同様に課題である。そして、社会人とし

での規律に関する点として、遅刻・欠席に対する適切な対応ができていないことや期限を守れないというコメントもいただいている。学生のうちから、社会人として、医療職者として働くことを考える機会を設け、大学卒業後を見据えた教育が必要である。

31 件中 2 件ではすでに退職した者がおり、その理由は、身体的/精神的な健康問題であった。早期離職を防止するためにも、心身共に健康に働き続けられるような自己管理が必要となる。

2) 今後の教育上の課題

本調査および卒後アンケートの結果をふまえ、以下の 3 点を今後の課題とする。

- (1) 科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができることを強化するために、4 年間継続して、各科目の講義や演習、実習のプログラム内容や演習方法等の工夫について検討を継続する。
- (2) 与えられたことだけでなく、現状を分析し目的や課題を明らかにすること、自分の意思をわかりやすく相手に伝える力を高められるようにするために、(1) の課題と合わせて各科目においてグループ討議やプレゼンテーションの機会などの教育方略を効果的に取り入れる。
- (3) 心身の健康を保持する方法の修得を促進し、各自が自身に適した就職先を含めて主体的にキャリアを形成できるよう支援する。

コンピテンシー基盤型教育が推進される中で、大学での学びを卒業時に留めるのではなく社会人となっても成長し続けていくという理念を学生が認識できるよう働きかけ、新カリキュラムに移行後も評価を継続していく必要がある。